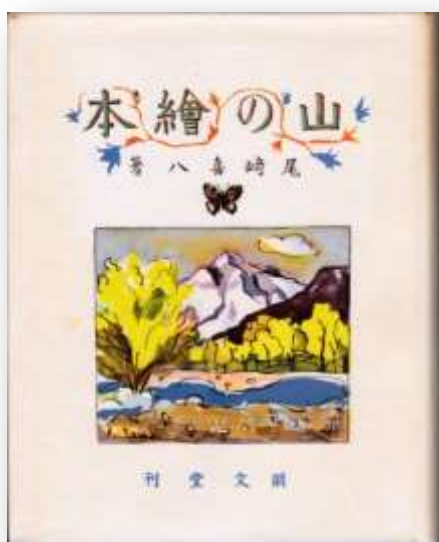


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第20号

(2014年1月)



北光クラブ
自然観察クラブ

尾崎喜八著『山の絵本—紀行と随想—』

(昭和10年7月25日・朋文堂発行)

たてしなの歌

君の土地。それは無数の輻射谷に刻まれて八方に足を伸ばした、やはり火山そのものの肢体の上の耕地であろうか。或はもっと古く、埋積し、隆起した太古の湖底の開析平野と、その水田に、今、晩夏の風が青々と吹きわたる河成段丘のきざしであろうか。

若しもおのが訪れ、おのが歓待されたひとつの土地に特別な愛と関心とを持ち、帰来その感銘を反芻し、思い出す事によって忘却の箇所を埋め、選択し、機序し、そこから世界の美の実証を織り上げる事が私のような旅人の仕方だとするならば、地理学を愛して尚且無知な私は、その無知と愛とのために、君を生み気味が生きている其の美しい土地への讃歌の冒頭で、すでに空しく思いまどうのだ、優しい心の友よ！

われわれは蓼科山からの帰るさに、其の北麓を八丁地川に沿うて降っていた。昔の人の素朴な適切な命名にほほえまされる量石から鳶岩の部落へかけて、路傍の崖のところどころ、見事に露出した火山岩の板状節理が見られ、そのあたり、農家の屋根は瓦でもなく萱でもなく、概ねあの鉄平石という石の薄板で葺かれていた。また対岸はるかに其の岩を切り出す石切場が見えて、原始的な橋梁の突桁をおもわせる岩石の天然の庇が幾つか、折からの洪水のような午後の日光を横ざまに浴びて、緻密な、爽やかな明暗の階調を織り出していた。(後略)

美しき5月の月に(若い女性に向っての山へのいざない)

その山形から云っても谷形から云っても、又その海岸形から見ても、日本の自然の調和的な美は世界でも稀有なものの一つだろうと私は思う。

長い広々とした裾野を曳く各種の火山、地平の青空をかざる蜿蜒たる皺曲山脈、おっとりとした優美な隆起準平原、沢や溪谷は複雑な線條を走らせて其傾斜面を鏤刻し、盆地や平野は葉脈のような河川に開析されて目も綾に横わっている。また会食を受けた無数の沈降海岸、断層海岸、その絵のような内海や入江、そ

の豪岩な海崖を洗って、太平洋や日本海の無限の水がいたるところ遊戯し奔騰する。

日本の自然―地形を基礎とした日本の自然は、吾々をすべて地理学者にはしないまでも、国土の美の骨組を成すものについて、吾々の旺盛な知識欲に何等かの楽しい鼓舞を与えないであろうか。

私は晩春の山旅を云う。しかし地理学者で無い私には、これから書く二三の山に關してあなた達を地形学的説明で饗応することは勿論出来ない。

シューマンの歌(リード)に「春の行旅」(フリューリングスファールト)というのがある。私は此歌と一緒に尽きぬ青春といったようなものを思う。此歌を歌うとルックサックをかついでさまよい出たくなる。地図と、時間表と、背囊と、一本の杖。春も關けて、いつも身軽な三等旅客、私は都塵を後にする。



武州景信山。

なんと云う事無しに私は此山が好きだ。

恐らくそれは、自分が此山を幾度も訪れて、遠近からの山容、其一本の山巒までも深く眼底に記憶しているからかも知れない。又中央線浅川駅から一里半、東京から4時間幾らという行程で、気の向いた時いつでも一日の山歩きの最初の展望地点へ達する事が出来るからかも知れない。その728米突という高さは、山の高さとしては何物でも無いには違いないが、高尾山から起って古い小仏の峠になり、それから此の景信の頭を崛起させ、たちまち西北西に転じてS字形の尾根をうねらせながら、陣場峰、三国山、三頭山と次第に高度を増して行く此武、相、甲、の三国に跨る国境山脈は、煦々として麗らかな晩春の一日の山旅には、捨てる事の出来ないコースである。

此一連の山脈は、好く晴れた日、東京日本橋辺の高いビルディングの上から眺めると大体東京駅降車口の円屋根に接して現れて、一段高い大菩薩連嶺の下に黒い鯨の背のように横っている。

浅川駅から歩き出して一里すこし、トンネルの入口、山が迫って小川が走る爪先上りの小仏の部落では今ちょうど八重桜の盛りである。

地質学者の所謂小仏層の岩石がそこらじゅうに露出している。山間の春は水の響と、天鵲絨のような鮮緑色の苔から。「ツィツィペ、ツィツィペ！」と四十雀が甘えるように鳴いている。ローザ・ルクセンブルクが牢獄の中で思い出したあの小鳥の游牝の時の愛の歌である。

風はゆるやかに空は青い。都会を遠く、時間の流れに黄金の重さがある。

(中略)

甲州大蔵高丸。

東京から西の空を眺めると、秩父連山の左に、遠く大菩薩の連嶺はほぼ高低二段の長壁をなしている。大蔵高丸は、ちょうどその二段の接点に当る1781米突の隆起である。曾て或人の書いた「春の大蔵高丸」という文章を読んで是非一度は行って見たいと思い、去年の五月の初め、快晴の日の未明に中央線初鹿野駅から此山へ入った。以下の断片は其時のノウトである。

午後11時30分飯田町発長野行。同行8人。翌日午前3時45分甲州初鹿野着。ランタンに火を入れる。揺れながら一步の先を照らす明りに、散った桜が雪のように白い。笹子山の真暗なふところで筒鳥の声。星座2つ3つ。日川の谷の右岸を行って、やがて左岸。かじか、せきれい、四十雀、頬白たちの夜明けの歌。

5時日川と別れて右へ大蔵沢を遡る。葱皮状分解を受けた石英閃緑岩の大塊にどうどうと響くエメラルドの水が当たっている狭い磧で、火を焚き、紅茶をわかし、パンとソーセージの朝飯。めいめい勝手に撮影。満山の新緑。植物図鑑を繰るのに忙しい。出発。

あんな高い山の肩に朝日が当たっている。燃えるようなミツバツツジ。踏んで行く沢筋の岩の間にはチゴユリ、チダケサシ、イカリソウ、イチリンソウ。それに可憐なクワガタソウが目につく。ゆっくり植物採集に來たいと思う。

「限りなく美しき5月の月に」(イム・ヴンデルシェーネン・モオナト・マイ)！ 肩にリュックサックの適度の重味を感じながら、朗らかに幽邃な朝を口笛吹きながら私達は登る。

※ 文中の表記は読みやすさを考慮して勝手ながら適宜直しています。

なお、本書掲載の「胴乱下げて」は全文が牧野富太郎著『牧野植物随筆』に引用されており、本誌第5号巻頭でも本文をご紹介しましたので、ご参照ください。

著者紹介・尾崎喜八

書名の下線
実線は自著、点線は翻訳

おざき きはち、1892年1月31日-1974年2月4日。

詩人、随筆家、翻訳家。山岳や博物学的な自然、人間を主題とした詩や散文、翻訳に多くの優れた作品を残した。文通のあったロマン・ロラン、ヘルマン・ヘッセなどドイツ詩人の翻訳紹介を始め、リルケ、メーテルリンク、ヴィルドラック、デュアメルなどの珠玉の翻訳がある。クラシック音楽への造詣も深い。



美ヶ原にて著者

東京の築地（東京市京橋区、現在の中央区京橋）出身。疳癪が強く早熟だったという。首席で通した小学校の頃から読書と自然に親しみを覚える。生家が回漕問屋という商家でもあり、京華商業学校を卒業。

会社勤めをしながらヨーロッパ文学を主に英訳本で読み耽る。19歳の時「文章世界」「スバル」で知った高村光太郎の反逆精神に魅せられてそのアトリエを訪問、以後芸術活動のみならず公私にわたり大きな影響を受けることになる。その頃ロマン・ロラン『トルストイ伝』『ジャン・クリストフ』にも感銘を受ける。

1915（大正4）年、23歳の時恋愛問題などが原因で廃嫡の身となり家を出、白樺派の長与善郎の家に寄宿したことで「白樺」の同人やその傍系の詩人、歌人、画家と知己になって行き、詩と芸術への研鑽が重ねられた。「白樺」にロマン・ロランの音楽評論集『近代音楽家評伝』を翻訳連載、1916年、これが最初の単行本となる。翌年からフランス語を学び、天文学にも興味を持つ。その翌年、恋人がスペイン風邪で急死すると、勤めていた会社を辞めて暫し荒涼とした日々を送り、「白樺」に戯曲風の作品『或る女の死』を書く。

その後母校京華商業の紹介で京城の朝鮮銀行に勤務するが馴染めず翌年退社、帰国後

は本郷に下宿し、高村光太郎と頻繁に交流。音楽を聴く真の喜びも知り、彼の推薦でベルリオーズ『自伝と書簡』を翻訳出版。この頃から本格的に詩作活動に入る。詩を書く
と光太郎に見せるが、「いいですね。もっとお書きなさい」と励ますだけで、決してそれ以上の批評はしなかったという。

1921 年から大正詩壇の詩人の総合的団体の雑誌「詩聖」に参加し、毎号詩を発表。この雑誌を通じて大藤治郎、野口米次郎、田中冬二、中野秀人、高田博厚らと交わる。水野葉舟の近所の戸越公園付近に転居。

1922 年（30 歳）、処女詩集『空と樹木』を上梓、高村光太郎と千家元麿に献ずる。ロマン・ロランにも同書を贈り返書を受け取る。海外では他にホイットマンなどにも私淑。人道主義、理想主義的立場を貫き、自然と人間についての思索に満ちた詩・随筆に独自の境地を開いて行く。翌年ベルリオーズ『ベエトーヴェン交響楽の批判的研究』。

1923 年の関東大震災で実家を助けに行ったのを機に父親と和解。翌年、かねてから交際していた水野葉舟の長女、実子（みつこ）と結婚し、東京下高井戸に新居を構える。畑を耕し花を栽培し、鶏を飼育しながら、文学に打ち込む。「一行たりとも書かざる日はなし」という生活。詩人が多く訪れ、光太郎を通じて草野心平を知るのもこの頃。第二詩集『高層雲の下』刊行。

1925（大正 14）年、片山敏彦によってヘッセの詩業を知りドイツ語の独習を始める。元来語学の才能があり、短期間で簡単な詩は理解できるように。10 余年の後にはヘッセ『フンデルング』『画家の詩』『詩集』などの翻訳本を出版するまでになる。

1926 年、「ロランの友情の使節として」高井戸の家にシャルル・ヴィルドラック夫妻の訪問を受けたのをきっかけに、ルネ・アルコス、ジョルジュ・デュアメル、マルセル・マルティネ等のフランスの文人との交際の輪が広がる。1927 年、ロラン『花の復活祭』『ヴィルドラック選詩集』、詩集『曠野の火』出版。

同年父親が死去し、翌年家督を相続して京橋の実家に転居。下高井戸での 4 年間の田園生活での交友関係に代わり、アナーキストや無頼派的詩人との交流が盛んになるが、

自然に乏しく味気ない生活の中で、自然への傾倒も一層深くなる。詩作の上では一つの壁にぶつかるが、この年出版された茅野蕭々訳『リルケ詩集』に大きな影響を受ける。

登山を始めたのもこの頃。登山家河田楨（みき）の『一日二日山の旅』『静かなる山の旅』にめぐり会い著者と親交を結ぶ。「失った武蔵野の代わりに山岳という一層広大な世界を得」という。烏帽子岳が初の登山、以後、霧の旅会の中心メンバーとして主として信州の山野に親しみ、中級山岳に多くの山行を重ね、山と高原の詩人と称される。

1931年、京橋の家を処分して荻窪に移ると、子どもも交えて自然観察、植物昆虫の標本に熱中、地理学や気象学の勉強も始める。山や高原への旅が生涯を通じて最も多い頃で、山旅の成果として詩集『旅と滞在』（1932年）など。「霧の旅」「山」「山小屋」などに載せた紀行文をまとめて、1935年に最初の散文集『山の繪本』を出版（装幀は片山敏彦、口絵をヘッセから贈られた水彩画が飾る、下図参照）。独自の文学的ジャンルを切り開き、多くの読者を獲得する。名訳で知られるエミール・ジャヴェル『一登山家の思い出』（1936年）以後、第二の散文集『雲と草原』、代表的な詩集となる『行人の歌』、翻訳ではヘッセ『ワンドルング（さすらい）』、デュアメル『北方の歌』『阿蘭陀組曲』『モスクワの旅』と毎年のように出版が続く。この他、職業野球球団「東京セネターズ」球団歌の作詞も手掛けている。

第二次世界大戦勃発の年から終戦までの間、厳しい制約の中で『雲』『詩人の風土』『高原詩抄』『此の糧』『二十年の歌』『組長詩篇』『同胞と共にあり』などの詩集、散文集を刊行。

1945年5月東京青山にあった自宅が空襲に遭い全焼。親類、知人宅を転々とする間に病を得て母親が死去。純粋な自然に囲まれたどこか遠い土地へのあこがれがいよいよ募り、翌年9月に長野県諏訪郡富士見村にある元伯爵渡辺 昭の別荘の一部を借りて、焼け残った大事な本とわずかな家



『山の繪本』口絵を飾る
ヘルマン・ヘッセの水彩画



財道具をもって移り住む。

富士見高原のこの分水荘での戦後の7年間は、精神的、肉体的、経済的に最も苦しい時代ながら、初めての土地で昼は農業に従事し、夜間には若い向学心に燃えた村の青年男女が集まって共に文学や自然を語ったり、句会を開いたりという暮らしで、「高原の広大な自然美と土地の人々の愛情とに引かれるまま遂に七年をここで暮らす」。戦中から戦後にかけて都会の文化人が農村に移住し、知的活動によって土地の人々から敬愛された例の一つで、今でも当時を回顧して皆一様に、永遠の文学青年の精神が宿る尾崎喜八を敬慕してやまないという。加えて現地の高原療養所で療養していた、後に各界で活躍する人々とも交流。

この生活の中からも、多くの作品が生まれた。『麦刈の月』、詩集『夏雲』、『高原暦日』、『美しき視野』、詩集『残花抄』、『碧い遠方』など、この期間に詩・散文の頂点を示す仕事をしている。雲、植物、鳥などをテーマとした作品も多く、山を愛する人々から大いに愛読されている。翻訳ではメーテルリンク『悦ばしき時』、ロマン・ロラン『花の復活祭』など。また、戦前から続く長野県の自然と郷土と山々への愛着もさらに深まり、長野県下の小中学校を中心として多くの校歌を作詞した。美ヶ原の美しい塔（1954年設置）に刻まれた詩『美ヶ原熔岩台地』も知られている。

1952年、還暦の年に東京世田谷区上野毛に転居。窓下に多摩川、丹沢や富士の山々も望める丘陵の上で、東京郊外にまだ残されていたかと思える幽邃な、樹木に囲まれた自然の中に、野鳥を聞きながら、相変わず質素な家で、思索に耽り、音楽を愛し、詩を書きながら清貧の生活を送る。放送、講演などの仕事や会合も多くなるが、音楽会や美術展などの楽しみ、若い人たちからの山行の誘いもあり、執筆も衰えを見せず。富士見時代の作品が多く納められた後期の代表的詩集『花咲ける孤独』、散文選集『わが詩の流域』、詩集『歲月の歌』、散文選集『山の詩帖』、散文集『さまざまの泉』などの他、ヘッセ『さすらいの記・童話』、『新訳ヘッセ詩集』、リルケ『時祷詩集』、ヴァッガール『牧場の本』、『リルケ詩集』、デュアメル『わが庭の寓話・動物譚と植物誌』、『慰めの音』

楽』などの翻訳。加えて過去の著作の改訂版増補版文庫版など盛んに出版が続く。

1958（昭和 33）年には串田孫一など彼の薫陶を受けた人々と共に「アルプ」誌を創刊、書名は彼の命名であり、多く執筆もする（25 年間に約 600 名の執筆者によって《アルプ時代》が創られるも、1983 年惜しまれつつ 300 号で終刊）。同年から『尾崎喜八詩文集』刊行、還暦の 1962 年に 9 巻まで（没後の 1975 年に全 10 巻が刊行）。

1966 年、幹線道路拡張により転居を余儀なくされ、北鎌倉明月谷に転居。同年、詩集『田舎のモーーツアルト』。翌年、入院手術や紫綬褒章受章の一方、散文集『私の衆讃



歌』、『夕べの旋律』、最後の詩集となる『その空の下で』と毎年のように出版。1968 年から 5 年間にわたって「芸術新潮」に「音楽と求道」を連載する。『素顔の鎌倉』（共著）、散文集『晚き木の実』『音楽への愛と感謝』と、死の直前まで芸術に対する意欲はいささかも衰えず、自然と共に、詩と音楽を愛する人々に囲まれながら幸福な晩年を過ごした。

1973 年 8 月に吐血し救急車で運ばれ、鎌倉額田病院に入院。一時は奇跡的に回復したが、翌年 2 月に胃潰瘍で死去。享年 82 歳。

1977 年、三回忌に明月院に墓碑建立。有志の人々が富士見から石碑を運ぶ。1980 年、「6 年の春秋」を「正に半生」と彼に言わしめた富士見の地に、「富士見に生きて」記念碑建立。

現在、富士見町立「高原のミュージアム」に喜八の遺品、文学資料が多数収蔵・展示されている他、北海道斜里町の「北のアルプ美術館」でも展示・資料研究が行われている。遺族・支持者・研究者からなる「尾崎喜八研究会」により年鑑「尾崎喜八資料」（1985～）が 16 号（2000）まで刊行され、WEB 上で公開もされている（果てしなく詳しい資料ですが、続号が待たれます）。毎年 2 月第 1 土曜日を目処に、遺族・ファン・研究者が集う「臘梅忌」が東京で開かれている。（2012 年現在第 39 回）

《参考文献》「岳人事典」（東京新聞出版局）

「世界山岳百科事典」（山と溪谷社）



「日本の山岳名著・解題」(大修館書店)

「山の名著 Best100」(山と溪谷・付録、日本山書の会編)

その他諸々の HP 情報

各山岳雑誌に尾崎喜八が初めて寄稿した(紹介された)ナンバーとその作品

「アルピニズム」第2号(アルピニズム社)昭和6年3月1日

「シー、ロイファー」(詩)

「山と溪谷」第7号(山と溪谷社)昭和6年5月1日

エミール・ジャヴェル「ブラン・スリジェの葡萄小屋」(訳)

「山小屋」第2号(朋文堂)昭和6年12月1日

エミール・ジャヴェル「二夏の思ひ出」(ダン・デュ・ミディ)(訳)

「山」第1巻第9号(梓書房)昭和9年9月1日 「山と音楽」

「ケルン」第30号(ケルン編集室)昭和10年11月1日

藤木九三「山の繪本」所感(書評)

「登山とはいきんぐ」第1巻第5号(大村書店)昭和10年12月1日

「初めに驚きありき」

「山と高原」第1巻第6号(朋文堂)昭和14年10月1日 「旅への祈り」

「旅」第17巻第1号(日本旅行倶楽部)昭和15年1月1日

「辰歳名士の旅行談・祖国を見る眼」(第16巻以前のナンバーについては不明)

「山」第163号(朋文堂)昭和24年10月1日 「入笠山」

「新ハイキング」第5号(ハイキング出版社)昭和26年1月1日 「入笠小屋」

「アルプ」創刊号(創文社)昭和33年3月1日 「高原の冬の思い出」(下の写真)

「ケルン」第1号(朋文堂)昭和33年10月1日 「わが山々に」(詩)

遅まきながら新年のお慶びおよび寒中お見舞いを申し上げます。

山書愛好者の一人として尾崎喜八を長年敬愛しその山の本も少しずつ収集してきました。

が彼は、「白樺」以来の詩人であり、理系の知識に裏打ちされた文を書き、英米仏の翻訳を多くし、音楽にも通じた人でした。今回その広い世界の一端をご紹介したいと思った次第です。

略歴のつもりが本文より長くなってしまいました。お年玉と思って(笑)お付き合いください。

(阿部)



落ち葉の安蘇山塊ハイキング
～大鳥屋山と岳の山、唐沢山城跡を訪ねて～
12月8日(日) 天気・はれ

岳ノ山、大鳥屋山とも県南の知る人も少ない比較的低山で、少しゆっくり朝7時の集合・出発でした。

かつての葛生は採掘する石灰岩のため町全体が白くくすんでいるようでしたが、佐野市に編入された今日、町並みはきれいに整備され、その背後に見える石灰工場の建物や高い煙突や、石灰岩を切り出した後の段々の山肌にその名残が見られます。

少し道に迷って登山口に着き、深い杉木立の山道を登り始めます。途中の「五丈の滝」は、倒木などのため展望はきかないし、今は水も少ないが、展望台や「滝見の松」の古木や、江戸時代の銘の祠やと、昔から名勝として親しまれていたことが偲ばれます。

まず岳ノ山(704m)に登ってお昼にし、のんびり昼食の後は、尾根伝いに向こうに見える大鳥屋山(691m)を目指します。途中にかなり険しい岩場があり、ひやひやしながら攀じ下りる一場面も。道はスギからヒノキ、アカマツ、地味の乏しい所は葉が落ちて明るい広葉樹林です。吹き抜ける風は冷たく、山道に汗ばんだ体も立ち止まるとすぐ冷えてきます。しかも冬の山道は日が短く、昼を過ぎてからはもう夕方の気配で道を急ぎます。山を下りるとすぐ日が暮れ始めました。

その後に余裕で見学できると思っていた「唐沢山城跡」や、石灰の町の名残の東武佐野線の葛生から先の廃線跡は、時間切れとなりました。味噌まんじゅうをお土産に買って帰宅の途に就きました。

※ 参加者(敬称略)

佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、
平井亜湖、小島美穂、石崎隆史・裕子、
阿部瑞穂・良司・みゆき(計12名)



※ 見た樹木(50音順)

岳の山山頂にて
日差しは暖かいが立ち止まると寒い

(広葉樹) アブラツツジ、ウリハダカエデ、エゴノキ、クリ、コアジサイ、
 コゴメウツギ、コナラ、サルトリイバラ、サンカクヅル、サンショウ、チドリノキ、
 テイカカズラ、トウゴクミツバツツジ(花)、ナツツバキ、ネジキ、フジ、ホオノキ、
 ミズキ、ミツバアケビ、モンゴリナラ(前頁背景の葉っぱ、これでも小さい方)、
 ヤマアジサイ、ヤマザクラ、ヤマツツジ(花)、リョウブ
 (針葉樹) アカマツ、イヌガヤ、スギ、ツガ、ヒノキ

✧ 見た鳥、聞いた鳥

ヒガラ、ヒヨドリ、ヤマガラ、ルリビタキ

《旅の記録》

鹿沼 7:30——葛生 8:15——宮原バス停——市営駐車場(WC) 9:10……9:30
 五丈の滝……11:30 岳ノ山(昼食) 12:30……14:30 大鳥屋山 14:50……
 16:00 町営駐車場——鹿沼

※当初予定の葛生駅(東武佐野線終点見学)、唐沢山城跡(散策)は
 時間切れのため見送りました。

✧ 安蘇山行の風景



葛生の町に入ると
セメント工場の煙が…



登山口の市営駐車場
(トイレあり)



暗いスギ林の
登り道



五丈の滝の展望台
展望きかず



滝見の松近くの祠
江戸時代のものらしい



植林地の急峻な傾斜を
ひたすら登って行く



岳の山山頂近くの祠
明治 3 年の銘あり



不動明王
享保 13 年の銘



想定外の岩場↑→
注意深く攀じ下りる



鹿よけネットの風景
岳の山の先の山林で



目指す大鳥屋山
すぐそこにあるような、遠いような



ヒノキ、アカマツ
広葉樹の尾根道



山道を埋める
モンゴリナラの落ち葉



ヤマツツジの狂い咲き



鬱蒼とした山頂で記念撮影
もう日が暮れそうな雰囲気



大鳥屋山山頂付近の祠
天保 12 年の銘あり



大鳥屋山山頂付近の
御獄大明神の碑
弘化 4 年の銘あり



大鳥屋山山頂の札と一等三角点





スギにフジのまわし？
なんだか苦しそう…



クラマゴケ



ヤブソデツ



尾根道でよく見た
ネジキの幹



オオバノイノモトソウ



ジュウモンジシダ
自然の造化の妙

山口さんの自然講座

石灰岩(ライムストーン)について

月報第19号が届き、阿部先生にお礼の電話をしたところ、次回の行き先の安蘇山塊には石灰岩が見られるそうです。それで、石灰岩について書くことにしました。

石灰岩というと紡錘虫(フズリナ)の化石を思いうかべられることでしょう。古生代の海に棲息していた動物で、その死骸から出た石灰質が固まってできた堆積岩です。炭酸カルシウムを50%以上含んでいます。栃木市鍋山のものはこのタイプで、紡錘虫石灰岩です。

これとは関係なく、海底火山の熱で化学的にできたものもあるので、必ず化石を含んでいるとは限りません。葛生のは、マグネシウム方解石や霏石(アラゴナイト)が苦灰石化してできた苦灰岩です。石灰岩とは光沢が少しちがうくらいで区別するのは難しいので、粉末にしたものを3分の1に薄めた酢酸に入れると、石灰岩は溶けてなくなりますが、苦灰岩は先ほど述べた鉱物が残るので区別できます。日本のものは量や質もよく、石灰岩はセメントやカーバイド、水酸化カルシウム(消石灰)、石灰窒素肥料その他に、苦灰岩はドロマイトレンガ、陶磁器、ガラスなどの工業用に広く使われています。

石灰岩が海底火山で熱変成したものが糖晶質(結晶質)石灰岩、すなわち大

理石です。大理石は建築石材に使われますが、岩石学上、まったく異なった岩石も大理石の仲間として扱われているので要注意。

安蘇山塊の石灰岩は、どのタイプなのでしょう。フズリナやウミユリ、サンゴなどの化石がないか探してみてください。その結果を楽しみにしています。

石灰岩によく似た岩石にチャートがあります。石灰岩の硬度は3〜5度で、釘で削れますが、チャートの硬度は7ですから、そう簡単にはいきませんし、酸に溶けません。ちなみに人の爪の硬度は2.5度です。

硬度(固さ)が出てきたので、モースの硬度表を示しておきましょう。鉱物は種類が多く、それぞれ固さが違います。そこで、鉱物学者のモースが一番柔らかい鉱物を1、一番固いものを10で表し、よく知られている鉱物を当てはめて作ったものです。

硬度1	滑石(かっせき)
2	石膏(せっこう)
3	方解石(ほうかいせき)
4	蛍石(ほたるいし)
5	磷灰石(りんかいせき)
6	長石(ちょうせき)
7	石英(水晶)(せきえい)
8	黄玉(おうぎよく)
9	鋼玉(こうぎよく)
10	金剛石(こんごうせき)



覚え方は「滑(かっ)石(せき)方(ほう)ニシテ 蛍(けい)磷(りん)長(なが)ク水(みず)黄(おう)鋼(こう)ニシテ 金色(こんじき)ナリ」です。滑石の次は石膏ですから、「滑・石」で始まり、最後は金剛石(ダイヤモンド)ですから「金色ナリ」で結びます。これから岩石を学ぼうという人は、是非この方法で覚えてくださいね。

石灰岩については、他にも書きたいことがありますが、安蘇山塊には関係なさそう(?)なので、今回はここまでにします。

(山口龍治)

※ 葛生の味噌まんじゅうの店に「ふずりな」という名の菓子も売られていたので、フズリナ石灰岩でしょうか。

八溝山地の小さな旅 ～松倉山と鎌倉山、社寺・史跡探訪～

山頂の一角にある小さな花崗岩の角石。三角点標石は、実に可愛い山頂の象徴物だ。

勿論、三角点は山頂ばかりではなく、見通しのきく測図に都合のよいところには至るところに設けられてはいるが、それすらも山頂で見たそれと同様の親しみを以て接することが出来る。

昔は——今では日本山岳会の長老となった人達が盛に登った当時——目指すところの峻嶺には立派な三角櫓が建っていて、好い目標となっていたらしい。そのころの紀行文などを読んで見ると、本当に三角点を目がけて進んだことが判り、山頂を窮めることは三角櫓に到達することなのであった。



松井幹雄著『霧の旅』(昭和9年10月17日・朋文堂発行)

一年で最も寒い季節、ということもあって今月は八溝山系の低山、とはいえ栃木百名山の一座で山頂に一等三角点(本点)のある烏山の松倉山(標高345m)に登り、松倉山観音堂に参詣しましょう。堂内には5体の仏像(県文化財)が安置されており、うち3体は室町時代の作です(開帳は1月17日)。また境内の社叢はシラカシの大木もある照葉樹林で、優れた自然状態を保っているとのこと。周辺の棚田の広がる山村風景も楽しみです。下山後、茂木方面へ向かい、是も栃木百名山の一座、鎌倉山(標高216m)に登ってみましょう。那珂川のほとり、大瀬登山口から往復1時間ほどです。さらに時間があれば千本城跡(県史跡、標高240mの山頂にある)、長安寺、安楽寺(樹齢600年のケヤキ)等も訪ねてみる予定です。

日 時：1 月 26 日（日）AM7:00 北小西門集合（解散は PM4:00 頃）

行 程：鹿沼——宇都宮——高根沢——南那須——烏山・大木須小学校跡㊤
（20 分）……松倉山入口バス停（20 分）……分岐（40 分）……観音堂
（10 分）……頂上分岐（5 分）……松倉山（45 分）……大木須小学校跡
㊤——大瀬・ふるさとセンター茂木㊤（40 分）……鎌倉山（20 分）
……大瀬㊤——千本城跡・長安寺・安楽寺——茂木——市貝——
芳賀——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、手袋、
軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、
ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ヘッドランプ、参考書
（栃木県の歴史散歩、栃木百名山ガイドブック、栃木の山 150 等）、
1/25,000 地形図は「烏山」「茂木」

会 費：おとな 500 円、子ども 250 円、
今年度初参加の方は保険料 800 円（3 月まで）。

申し込み：1 月 24 日（金）までに、チャレンジスクール申込書で北光クラブ、
または阿部まで。

問合せ：電話 090-1884-3774（阿部）



☞ 本号の内容 ☜

表紙の本	尾崎喜八著『山の絵本—紀行と随想—』・・・・・・・・・・ 2
活動報告	落ち葉の安蘇山塊ハイキング～大鳥屋山と岳の山、唐沢山城跡を訪ねて～・・ 11
次回案内	八溝山地の小さな旅～松倉山と鎌倉山、社寺・史跡探訪～・・・・・・・・ 16

会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。
 また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭にあります。（無料）
 確実な入手をご希望の方は、年会費（1,200 円）をお納めいただければ、
 ご自宅まで郵送いたします。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第20号

WEB 版

2014年1月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

